

2009年12月11日(金)15:00-17:30

九州産業大学1号館2階S201番教室

# Symposium

景観の形成・保全に、ひとはどこまでかかわるべきか———持続可能なデザインの追求———

## 趣旨

景観をデザインすることは、自然の造形作用に、社会が美的価値に基づいて参与することを意味します。とくに近年、資源の枯渇、地球温暖化、生物多様性の危機が顕在化する中で、都市空間の緑化と水循環の積極活用や、自然地域の再生・復元など、自然のはたらきに深く学び広く関与する文化の再生・形成が、景観デザインの重要な課題として再認識されつつあります。

自然のはたらきを理解するために、知覚的な手掛かりとして〈景観〉をあつかう研究領域に「景観生態学」があります。しかし景観生態学は景観をとおして自然の営みを追究するだけでなく、人と自然の相互作用を重視し、地域の生態学的な課題に対する実践的な解決策をも提供してきました。

このように景観生態学は景観デザインと共通する部分をもちながら、これまで我が国においては、相互の交流が必ずしも活発に行われてきたとは言えません。そこで本シンポジウムでは景観生態学の方法と実践を紹介し、そのうえで両分野におけるこれまでの経験や知見について議論して、生態学と環境美学のあるべき姿を探ります。

そのなかで、農業文化を核とし、それを表象するものとして形成された里山や棚田や牧草地のような景観の保全に人はどこまでかかわるべきかを、担い手不足や外来の動植物等の移入への対応などを踏まえて議論したいと思います。また景観の生態学的な健全さと美的価値の追求との関係について、人の役割と位置づけや技術的課題を交えて吟味します。

文化とは危機に直面する技術であるとも言われます。また現代社会の様々な危機のもと、生き方をデザインする手段として農業・農山村のブームが再来しつつあるとも言われています。そのようなことを踏まえつつ、いまいちどデザインするというこの意味を考えてみたいとも思います。

## プレナリーセッション・スピーチ

横山秀司(九州産業大学)・地理学

■トピックス———地理学における景観生態学的視点

———ヨーロッパにおける景観生態学と土木の協働の事例  
———景観生態学と社会資本整備

## パネリスト

長澤良太(鳥取大学)・地理情報システム

鎌田磨人(徳島大学)・生態系管理工学

深町加津枝(京都大学)・里山景観

内田泰三(九州産業大学)・植物生態学

関 文夫(大成建設)・土木デザイン

## コーディネータ

山下三平(九州産業大学)・土木工学



Hideji Yokoyama



Ryota Nagasawa



Mahito Kamada



Katsue Fukamachi



Taizo Uchida



Fumio Seki